

資料・松川二郎

奥 須磨子 所員・経済経営学部助教授

松川二郎を取り上げるにあたって

人の移動形態のひとつに旅あるいは旅行がある。近代の日本にあっては、昭和初期、すなわち1920年代半ばから1940年ころにかけて、旅行熱がたいへんな昂揚をみせたことが明らかにされている。昭和のスタートとほぼ同時に、難儀の多い「旅」から離陸して明るく軽快なイメージをもつ「旅行」が成立し、以降1940年ころまで「楽しみ」のための旅行が盛んに行われ、大衆化していったということである⁽¹⁾。

この時期の旅行熱昂揚に大きな役割をはたしたのが、1924年に設立された日本旅行文化協会（後に日本旅行協会と改称）の活動や営利の観点を導入したJTBの1925年以降の活動の活発化、あるいは1934年の国立公園の発足といった、旅行に関わる組織や制度の整備であったことは間違いない。これを前提としつつも、旅行熱と称されるほど、多くの人々が旅行への関心をかきたてられ、旅行へと実際に誘われる経緯を想像してみると、旅行案内書の役割を忘れるわけにはいかないように思われる。また、案内書は、当時の人々の旅行に対する気分や風俗を知る手がかりとして重要でもあろう。案内書としては、日本旅行文化協会が1924年4月に創刊した旅行専門雑誌『旅』や鉄道省が編纂した『鉄道旅行案内』などの他に、数多くをみることができる。

旅行熱の時期には、有名無名の様々な書き手になるものが、大小様々な出版社から次々と刊行されていた。それら多数を眺めて、この時期を象徴する書き手として一人を挙げるとすれば、それは誰になるであろうか。その著作数の多いことにおいて、何よりも、その文章が軽妙洒脱で当時の軽快な旅行のイメージをリードしたことにおいて、松川二郎をおいて他にないように思われる。実際、1970年代半ばには「もしどこにも就職せずに旅の記事だけで暮らしをたてていたとしたら、この松川二郎こそ、わが国最初のプロの旅行

(1) 白幡洋三郎『旅行ノススメ』（中央公論社、1996年）参照。

作家といえようか。そして趣味の旅を普及させた功労者でもある」と評されたり、1980年代初めには「旅行ライターの先駆者」と位置づけられたりしている⁽²⁾。さらに、近年にあっても、彼の著作の一部を取り上げたり、著書の一冊に注目したりする人もある⁽³⁾。

しかしながら、彼の旅行作家としての仕事の全体を知りうるものは整理されてはいないようである。また、「松川二郎については、東京世田谷の池尻に住んでいたというだけで、その履歴は全くわからない⁽⁴⁾」とされてきた。そこで、まず彼の著作年表の作成に取りかかった。この過程で、彼の経歴についても多少は分かってきた。以下は、これまで拾い出した彼の著作、および経歴に関する断片の列挙である。残念ながら十分なものには成り得ていないが、中間報告としてとりあえず記すこととする。

著作目録

著作に関する凡例

- 1 単行本(初版)・雑誌掲載著作・新聞掲載著作の別に、発表年月日順に配列した。
- 2 各項目の記載の順序は、著作の表題・発行所あるいは誌紙名(巻号数)・発行日。署名については「松川二郎」の場合は省略、それ以外の署名および無署名の場合は表題の後に記した。
- 3 表題および署名は、単行本の場合は内表紙のもの、雑誌掲載の場合は本文のものを採った。表紙(単行本の場合)あるいは目次(雑誌の場合)との異同は、必要と思われるもののみ注記した。
- 4 新聞連載の場合は、連載開始と終了を示し、その間の詳細は省略した。
- 5 ?印は刊行情報はあるが所蔵先未確認のもの。

*印は所蔵先は判明しているが未見のもの。

[]でくくったものは推測を含む情報。

印はラジオ番組の紹介記事であり、必ずしも松川二郎の著作とは言えないものであるが、参考のため掲げた。

(2) 山本鉦太郎『旅行案内記三百二十年』山本鉦太郎、1975年、27ページ。「対談・田村隆一／牛山純一」日本交通公社出版事業局編・刊『人はなぜ旅をするのか 第九巻 “陸海空” 旅行の時代』1982年、16ページ。

(3) 種村季弘・池内紀『温泉百話 西の旅』筑摩書房、1988年、355～357ページ。山本夏彦「松川二郎著『全国花街めぐり』」『文芸春秋』1999年10月号、444～445ページ。

(4) 山本鉦太郎「大正～昭和期のガイドブック」日本交通公社出版事業局編・刊『人はなぜ旅をするのか 第九巻 “陸海空” 旅行の時代』1982年、94ページ。

I - A 編著書

- ? 樺太探検記⁽⁵⁾ [1910 (明治43) 年 6 月]
 南米と南洋 実業之日本社 1911 (明治44) 年 8 月 8 日
- ? 南洋の人⁽⁶⁾ 日本農業社 [1912 (大正 1) 年 9 月]
- ? 東京見物⁽⁷⁾ [1915 (大正 4) 年 7 月]
 四季収穫 蔬菜栽培法 長久社書店 1916 (大正 5) 年 5 月 16 日
 学理実験 米麦増収栽培法 長久社書店 1916 (大正 5) 年 6 月 10 日
 法華経の行者 日蓮上人 磯部甲陽堂 1917 (大正 6) 年 6 月 12 日
- ? 東京史蹟見物⁽⁸⁾ [1918 (大正 7) 年 7 月]
 一泊旅行 土曜から日曜 東文堂 1919 (大正 8) 年 6 月 16 日
 赤穂義士 (精神教育帝国軍人叢書: 第 1 編)
 通俗軍事教育会 1919 (大正 8) 年 7 月 8 日
 義士の討入 (精神教育帝国軍人叢書: 第 2 編)
 通俗軍事教育会 1919 (大正 8) 年 7 月 18 日
- ? 保養遊覧 湯治場めぐり⁽⁹⁾ 東文堂 [1919 (大正 8) 年 7 月]
 郊外探勝 日がへりの旅⁽¹⁰⁾ 東文堂 1919 (大正 8) 年 10 月 15 日
- ? 保養遊覧 新温泉案内⁽¹¹⁾ [有精堂]
 東京近郊 写真の一日 アルス 1922 (大正 11) 年 2 月 18 日
- * 歓楽郷めぐり 三徳社 1922 (大正 11) 年 2 月
 名所回遊 四五日の旅 裳文閣 1922 (大正 11) 年 5 月 15 日
- ? 療養本位の温泉⁽¹²⁾ [1922 (大正 11) 年 5 月]
 療養本位 温泉案内 三徳社 1922 (大正 11) 年 6 月 10 日
 安くて便利な 新しい海浜へ 心友社 1922 (大正 11) 年 6 月 20 日

(5) 「松川二郎著作書目」(1922年6月20日刊『安くて便利な 新しい海浜へ』奥付前)参照。

(6) 「快著南洋の人が農村青年に与ふる教訓」(『日本農業雑誌』8巻10号、1912年10月1日、118～119ページ)参照。

(7) 「松川二郎著作書目」(1922年6月20日刊『安くて便利な 新しい海浜へ』奥付前)参照。

(8) 「松川二郎著作書目」(1922年5月15日刊『名所回遊 四五日の旅』奥付後)、「松川二郎著作書目」(1922年6月20日刊『安くて便利な 新しい海浜へ』奥付前)参照。

(9) 「批評と紹介」(『読売新聞』1920年7月22日)、「松川二郎著作書目」(1922年5月15日刊『名所回遊四五日の旅』奥付後)、「松川二郎著作書目」(1922年6月20日刊『安くて便利な 新しい海浜へ』奥付前)参照。

(10) 国会図書館所蔵の再版本(1919年11月15日)の場合、表紙は「近郊探勝 日がへりの旅」、内表紙は「郊外探勝 日がへりの旅」、奥付には題名が記載されていない。

(11) 1922年7月21日『読売新聞』紙上の有精堂の広告に「本年訂正版」とあることからすると、初版は1921年以前の刊行であるかもしれない。

(12) 「松川二郎著作書目」(1922年5月15日刊『名所回遊 四五日の旅』奥付後)参照。

療養遊覧 山へ海へ温泉へ	日本書院	1923 (大正12)年7月3日
珍味を求めて 舌が旅をする	日本評論社	1924 (大正13)年7月5日
療養遊覧 新海浜案内	三進堂書店	1925 (大正14)年5月10日
旅の科学	有精堂書店	1925 (大正14)年5月29日
科学より見たる 趣味の旅行	有精堂書店	1926 (大正15)年4月15日
趣味の旅 民謡をたづねて	博文館	1926 (大正15)年7月5日
趣味の旅 名物をたづねて	博文館	1926 (大正15)年11月24日
山の民謡・海の民謡	博文館	1927 (昭和2)年4月14日
全温泉案内	有精堂書店	1927 (昭和2)年5月20日
名勝温泉案内 (大日本百科全集: 第1巻)		
	誠文堂	1927 (昭和2)年7月5日
名勝温泉案内	誠文堂	1927 (昭和2)年7月15日
趣味の旅 不思議をたづねて	博文館	1928 (昭和3)年3月22日
趣味の旅 武蔵野をたづねて	博文館	1928 (昭和3)年6月10日
あゝ彼の 赤い夕日 (内田軍曹手記 松川二郎編)		
	内田後援会出版部	1928 (昭和3)年11月25日
趣味の旅 新民謡をたづねて	博文館	1929 (昭和4)年5月25日
全国花街めぐり	誠文堂	1929 (昭和4)年6月25日
東京近郊 日がへりの行楽	誠文堂	1930 (昭和5)年6月5日
全国 郷土民謡集	誠文堂	1930 (昭和5)年10月5日
* 合法的汽車電車安乗り法 (Seibundo's10sen library: 73)		
	誠文堂	1930 (昭和5)年11月
三都花街めぐり (誠文堂文庫)	誠文堂	1932 (昭和7)年11月10日
郷土の民謡 (再版)	巧人社	1934 (昭和9)年2月20日
東京近郊 日帰りの行楽 附ハイキング・コース		
	金正堂	1934 (昭和9)年2月25日
近畿日帰りの行楽	大文館書店	1935 (昭和10)年10月15日
* 全名勝温泉案内 ⁽¹³⁾	大修堂	1937 (昭和12)年
主治病本位 温泉地案内 (昭和14年版)		
	白揚社	1939 (昭和14)年6月25日
中・西アジア地政治誌	新興亜社出版部	1941 (昭和16)年12月15日
大東亜地政治学	霞ヶ関書房	1942 (昭和17)年3月30日

(13) 国会図書館所蔵のものは、1946年より行方不明とのこと。

南の民話と民謡	白揚社	1943 (昭和18)年8月30日
? アラスカ・シベリヤ地政学 ⁽¹⁴⁾	桜木書房	1943 (昭和18)年
新日本歴史 第一巻 ⁽¹⁵⁾	新日本歴史学会	1949 (昭和24)年7月20日
新日本歴史 第二巻	新日本歴史学会	1947 (昭和22)年12月25日
新日本歴史 第三巻	新日本歴史学会	1948 (昭和23)年6月25日
新日本歴史 第四巻	新日本歴史学会	1949 (昭和24)年1月15日
新日本歴史 第五巻	新日本歴史学会	1949 (昭和24)年7月20日
新日本歴史 第六巻	新日本歴史学会	1949 (昭和24)年7月20日
新日本歴史 第八巻	新日本歴史学会	1949 (昭和24)年12月20日

I - B 雑誌掲載のもの

興津小学の学校園 松二生

『日本農業雑誌』2巻2号 1906 (明治39)年10月5日

悪戯な小兎 『日本農業雑誌』2巻3号 1906 (明治39)年11月5日

悪戯な小兎 後日譚

『日本農業雑誌』2巻4号 1906 (明治39)年12月5日

農業振興と鉄道 『日本農業雑誌』8巻8号 1912 (大正1)年8月1日

農業低級金融論 『日本農業雑誌』8巻9号 1912 (大正1)年9月1日

米の関税問題に就て西垣学士の教を乞ふ

『日本農業雑誌』9巻6号 1913 (大正2)年5月1日

農村振興の捷徑 『日本農業雑誌』9巻8号 1913 (大正2)年7月1日

英国の農業復活運動

『日本農業雑誌』10巻1号 1914 (大正3)年1月1日

全国農業沿革史資料彙纂(1)

『日本農業雑誌』10巻7号 1914 (大正3)年7月1日

全国農業沿革史資料彙纂(二)無署名

『日本農業雑誌』10巻8号 1914 (大正3)年8月1日

農業に対する時局の影響

『日本農業雑誌』10巻11号 1914 (大正3)年10月12日

(14) 「略歴 松川二郎」(1943年8月30日刊『南の民話と民謡』奥付前)、「文献月報」(『経済学雑誌』12巻5号、1943年5月)参照。なお、「文献月報」では表題は「アラスカ・シベリア地政治学」となっている。

(15) 1947年刊のものがあるとの情報もあるが未確認。1949年刊の内表紙には「新日本歴史学会編修」とあるが、奥付では「編修者 松川二郎」となっている。第二巻以降も同様。

屍山血河青島従軍行	『日本農業雑誌』10巻12号	1914(大正3)年11月1日
屍山血河青島従軍行	『日本農業雑誌』10巻13号	1914(大正3)年12月1日
従軍ノート	『日本農業雑誌』11巻1号	1915(大正4)年1月1日
米価調節と米券問題	『日本農業雑誌』11巻5号	1915(大正4)年5月1日
東蒙古の富源研究(上)	『日本農業雑誌』11巻8号	1915(大正4)年7月1日
米券倉庫の一機能	『日本農業雑誌』12巻4号	1916(大正5)年4月1日
動産抵当の農業金融	『日本農業雑誌』12巻6号	1916(大正5)年5月1日
軍国主義と農業動員	『日本農業雑誌』12巻7号	1916(大正5)年6月1日
通俗講話 米券の質入及売買	『日本農業雑誌』12巻8号	1916(大正5)年7月1日
新山手繁昌記	『中央公論』38年13号	1923(大正12)年12月1日
新東京花街鳥瞰	『中央公論』39年1号	1924(大正13)年1月1日
舌が旅をする	『中央公論』39年4号	1924(大正13)年4月1日
踊と唄の地方色	『中央公論』39年6号	1924(大正13)年6月1日
森林美の中をゆく	『中央公論』39年8号	1924(大正13)年7月1日
波にゆられて	『中央公論』39年9号	1924(大正13)年8月1日
水郷の秋の行楽	『中央公論』39年11号	1924(大正13)年10月1日
江戸時代の旅費調べ	『中央公論』39年13号	1924(大正13)年12月1日
炬燵酒恋し北国の旅	『中央公論』40年2号	1925(大正14)年2月1日
科学旅行 箱根めぐり	『行楽』1巻2号	1925(大正14)年5月1日
舌の旅・湖水めぐり	『中央公論』40年8号	1925(大正14)年7月1日
民謡の郷土色	『地方』33巻11号	1925(大正14)年11月1日
諸国民謡行脚2	『旅』3巻3号	1926(大正15)年3月1日
諸国民謡行脚3	『旅』3巻4号	1926(大正15)年4月1日

名所のにせもの	『太陽』32巻10号	1926(大正15)年8月1日
共産村めぐり	『改造』8巻9号	1926(大正15)年8月1日
春を売る女の地方色		
	『新小説』31年9号	1926(大正15)年9月1日
祭礼の地方色	『新小説』31年10号	1926(大正15)年10月1日
「結婚」の地方色	『地方』34巻12号	1926(大正15)年12月1日
正月の民謡	『黒潮』32年1号	1927(昭和2)年1月1日
武蔵陵墓地ローマンス		
	『改造』9巻2号	1927(昭和2)年2月1日
「万葉」の二迷橋	『黒潮』33年3号	1927(昭和2)年3月1日
東京郊外の新名所	『中央公論』42年4号	1927(昭和2)年4月1日
不思議をたづねて	『太陽』33巻12号	1927(昭和2)年10月1日
カメラが旅をする(三)		
	『旅』5巻1号	1928(昭和3)年1月1日
珍風俗をたづねて(上)		
	『旅と伝説』1巻1号	1928(昭和3)年1月1日
梅花郷をたづねて	カメラが旅をする 四	
	『旅』5巻2号	1928(昭和3)年2月1日
民謡に現れた明治維新前後の世相		
	『太陽』34巻2号	1928(昭和3)年2月1日
田沢湖十和田八郎潟 恋の三角伝説		
	『旅と伝説』1巻2号	1928(昭和3)年2月1日
民謡二題	『旅と伝説』1巻2号	1928(昭和3)年2月1日
墓は其人をあらはす	カメラが旅をする(五)	
	『旅』5巻3号	1928(昭和3)年3月1日
民謡伝説をたづねて		
	『旅と伝説』1巻3号	1928(昭和3)年3月1日
物々交換の行はれる地方 「珍風俗をたづねて」の二		
	『旅と伝説』1巻3号	1928(昭和3)年3月1日
桜の名木伝説	『旅と伝説』1巻4号	1928(昭和3)年4月1日
業平が武蔵野の旅から生れた三つの伝説		
	『旅と伝説』1巻7号	1928(昭和3)年7月1日
新民謡をたづねて(上)		
	『旅』5巻8号	1928(昭和3)年8月1日

旅行随筆『橋』	『旅と伝説』1巻9号	1928(昭和3)年9月1日
温泉名物の話	『旅』5巻12号	1928(昭和3)年12月1日
炉辺漫談 法螺吹き南谿		
	『旅』6巻1号	1929(昭和4)年1月1日
日本武尊東征コース		
	『旅と伝説』2巻1号	1929(昭和4)年1月1日
日本八景私論	『旅』6巻2号	1929(昭和4)年2月1日
名橋をたづねて	『旅』6巻3号	1929(昭和4)年3月1日
名橋をたづねて ⁽¹⁶⁾	『旅』6巻4号	1929(昭和4)年4月1日
新しい郊外名所	『旅』6巻5号	1929(昭和4)年5月1日
郷土色豊かな民謡ところどころ		
	『旅』6巻6号	1929(昭和4)年6月1日
多摩川布晒しの歌踊		
	『旅』6巻7号	1929(昭和4)年7月1日
趣味の旅行講座 芭蕉が月見の旅		
	『旅』6巻8号	1929(昭和4)年8月1日
新説 榛名は歌垣の山		
	『旅』6巻10号	1929(昭和4)年10月1日
紅葉の民謡	『旅』6巻10号	1929(昭和4)年10月1日
旅の漫談 女に持てた話 悩まされた話		
	『旅』6巻11号	1929(昭和4)年11月1日
妙義縦走団遭難の記		
	『旅』6巻12号	1929(昭和4)年12月1日
正月風俗をたづねて 福貰ひと厄除		
	『旅』7巻1号	1930(昭和5)年1月1日
郷土スポーツをたづねて		
	『旅』7巻2号	1930(昭和5)年2月1日
風変りな神様巡礼	『旅』7巻3号	1930(昭和5)年3月1日
足柄峠に立ちて	『旅』7巻4号	1930(昭和5)年4月1日
後篇 全国花街めぐり		
	『旅行時代』1年1号	1930(昭和5)年7月1日
名物ローマンス	『郷土風景』1巻1号	1932(昭和7)年3月1日

(16) 目次では「名橋をたづねて(二)」

- 郷土スポーツとしての 大風揚と風合戦
『郷土風景』 1巻5号 1932(昭和7)年7月1日
- 山の湖水を語る 『郷土風景』 1巻8号 1932(昭和7)年10月1日
- 歴史の嘘 『日本歴史』 1巻4号 1946(昭和21)年10月1日
- 「奥の細道」を歴史する
『日本歴史』 2巻1号 1947(昭和22)年1月15日

I - C 新聞掲載のもの

- 暗夜に炎々たる火柱 千葉県下天然瓦斯の噴出 松川特派員
『読売新聞』 1908(明治41)年6月22日
- 探検記 第一信～第三信 無署名
『読売新聞』 1908(明治41)年12月25日～12月29日
- 探検短信(一)～(六)木公
『読売新聞』 1909(明治42)年1月14日～1月20日
- 探検記(一)～(三八)全39回(松川)木公
『読売新聞』 1909(明治42)年2月1日～3月30日
- 小洲君を送る 木公 『読売新聞』 1909(明治42)年3月21日
- 鎮海繁盛記(一)～(二)木公
『読売新聞』 1912(明治45)年6月12日～6月13日
- 北陸の春の旅(一)～(一二)まつかわ生
『読売新聞』 1913(大正2)年4月24日～5月7日
- 勝浦より小湊(一)～(四)まつかわ生
『読売新聞』 1913(大正2)年7月11日～7月16日
- 涼しい岩越線(一)～(六)まつかは生
『読売新聞』 1913(大正2)年8月9日～8月17日
- 世に知られぬ避暑地日本全国に亘って(一)～(一七)
『読売新聞』 1923(大正12)年8月1日～8月29日
- 羽越新線名所めぐり 全15回
『読売新聞』 1924(大正13)年7月20日～8月4日
- お国自慢盆をどり 『読売新聞』 1924(大正13)年8月16日
- 多摩川畔の新鉱泉(上)(下)
『読売新聞』 1924(大正13)年9月10日～9月11日
- 間違だらけの旅行案内(上)(下)
『読売新聞』 1925(大正14)年8月8日～8月10日

男鹿獅子（寄稿） 『読売新聞』 1926（大正15）年2月27日
空樽叩くは樽砧 直径一町の踊りの環 盆踊りの蔵払ひをする松川二郎さん
の趣味講座（顔写真）

『読売新聞』 1927（昭和2）年7月14日

盆踊 松川二郎（顔写真）

『東京朝日新聞』 1927（昭和2）年7月14日

民謡と伝説 松川二郎さんの話

『読売新聞』 1927（昭和2）年8月13日

薪を焚き鐘や太鼓で雨乞する民謡と踊 大気を震動させて雨を降らす合理的
に行はれる雨乞 松川二郎氏の夏の趣味講座

『読売新聞』 1927（昭和2）年8月22日

雨ごひ 松川二郎

『東京朝日新聞』 1927（昭和2）年8月22日

逃水の伝説が屋気楼で現はる 武蔵野のロマンスを訪ねて 松川二郎氏の
趣味講座（顔写真） 『読売新聞』 1927（昭和2）年11月8日
少年少女講座 東京近郊の名所旧跡 松川二郎（顔写真）

『読売新聞』 1928（昭和3）年10月7日

日帰りの近郊紅葉名所 湊谷美の碓氷の紅葉 岩の美に映える妙義 来月
初旬が観頃（顔写真） 『読売新聞』 1929（昭和4）年10月18日
名物にうまい物なし 伝説で売れたのが多い 松川二郎氏の『名物ローマ
ンス』

『読売新聞』 1931（昭和6）年1月21日

忠義の乳母が元祖の家康命名の『姥ヶ餅』松川二郎氏の「名物ローマンス」
第二講

『読売新聞』 1931（昭和6）年1月22日

山のロマンス 趣味講座松川二郎

『読売新聞』 1931（昭和6）年6月20日

山の伝説 後七時三十分 松川二郎

『東京朝日新聞』 1931（昭和6）年6月20日

婦人講座 利根水郷の秋を語る 後二時 松川二郎

『東京朝日新聞』 1932（昭和7）年10月21日

ラジオ出演（『読売新聞』『東京朝日新聞』の放送番組表より）

趣味講座 盆踊の話

東京 JOAK 1927（昭和2）年7月14日午後7時25分から

夏の趣味講座 雨乞の民謡と踊

- 東京 JOAK 1927 (昭和2)年8月22日午後7時25分から
 趣味講座 武蔵野のローマンスをたづねて
- 東京 JOAK 1927 (昭和2)年11月8日午後7時25分から
 少年少女講座 東京近郊の名所旧跡をたづねて
- 東京 JOAK 1928 (昭和3)年10月7日午前9時30分から
 趣味講座 紅葉の名所を唄で行く
- 東京 JOAK 1929 (昭和4)年10月18日午後7時25分から
 家庭講座 名物ローマンス(一)
- 東京 JOAK 1931 (昭和6)年1月21日午前10時30分から
 家庭講座 名物ローマンス
- 東京 JOAK 1931 (昭和6)年1月22日午前10時30分から
 趣味講座 山のロマンス
- 東京 JOAK 1931 (昭和6)年6月20日午後7時30分から
 婦人講座 水郷の秋を語る
- 東京 JOAK 1932 (昭和7)年10月21日午後2時から

経歴に関する断片

- 略歴 その 共同出版社編纂部編『現代出版文化人総覧(昭和十八年版)』

共同出版社、1943(昭和18)年2月15日、695ページ
 「凡例」に「氏名、住所、生年、出身府県名、出身校及び科名、職
 歴、現職、執筆専門項目、所属団体等を収録し、その代表作の一
 部題名、及び昭和十六年以降雑誌執筆の論文作品等の一部題名を付
 し、一見以て個々人の概略が判明するやうに工夫したもの」とある。

マツカハジロウ
 松川二郎 明二〇生
 麹町区九段四ノ二 薩摩館
 (九段七五二)
 福井
 新聞記者、雑誌社長
 地政治学

1. 大東亜地政治学、シベリア地政治学(霞ヶ関書房)

- 略歴 その 『南の民話と民謡』

白揚社 1943(昭和18)年8月30日 420ページ
 略歴 まつかはじろう
 松川二郎

明治二〇年福井県生、読売新聞記者、雑誌旅行時代社長を経て現在著述業。

「南米と南洋」「南洋の人」「民謡をたづねて」「中西アジア地政治誌」「大東亜地政治学」「アラスカ・シベリヤ地政学」等の著書あり。

居所 東京都麹町区九段四ノ二 薩摩館

- 「福井県の武生に、父の家と母の墓とを訪ふた」「北陸の春の旅(十二)」
『読売新聞』1913(大正2)年5月7日

Ⅲ - A 読売新聞記者から『日本農業雑誌』主幹へ

- 1906(明治39)年1月1日～1912(明治45)年12月29日『読売新聞』に社員として掲載あり

「社務多忙に付年始の礼を欠く 読売新聞社員」

『読売新聞』1906(明治39)年1月1日

「社務多忙に付年末年始の礼を欠申候 大正元年十二月 読売新聞社員一同」
『読売新聞』1912(大正元)年12月29日

- 1907(明治40)年9月～1908(明治41)年5月ころまで『日本農業雑誌』記者

『日本農業雑誌』3巻1号 1907(明治40)年9月5日「記者の手帳」に「松二」と出る、80ページ

『日本農業雑誌』4巻6号 1908(明治41)年6月5日「記者の手帳」に「松二子」と出る、80ページ

- 1908(明治41)年11月25日 読売新聞社「松川二郎(木公)を樺太・シベリア探検に特派と社告」

読売新聞100年史編集委員会編『読売新聞100年史 別冊 資料・年表』
1976(昭和51)年、読売新聞社、223ページ

1908(明治41)年12月22日『読売新聞』「探検記者の出発!! 本日午後八時五十五分上野発」と報じる

1908(明治41)年12月25日 小樽出帆「探検短信(一)」『読売新聞』1909(明治42)年1月14日

1909(明治42)年1月8日 樺太(豊原)出発「探検記者の消息」『読売新聞』1909(明治42)年1月9日

1909(明治42)年1月30日 帰京「編輯日誌」『読売新聞』1909(明治42)年1月31日

1909(明治42)年1月31日 出社「編輯日誌」『読売新聞』1909(明治42)年

2月1日

1909(明治42)年2月1日「探検記」の連載開始『読売新聞』1909(明治42)年2月1日

- 1914(大正3)年1月『日本農業雑誌』主幹
「英国の農業復活運動」肩書き『日本農業雑誌』10巻1号 1914(大正3)年1月1日 36ページ
- 1914(大正3)年10月「本誌主幹の従軍 本誌主幹木公松川二郎氏は、東京毎日新聞記者として、今回青島攻囲軍に従軍を許可せられ、去る七日朝新橋発、同八日午後門司出帆」
「社告」『日本農業雑誌』10巻11号 1914(大正3)年10月12日 248ページ
「大正三年の青島攻囲戦には、東京の一新聞から従軍記者として派遣せられ」
「編纂者として一言」『あゝ彼の 赤い夕日』1928(昭和3)年11月25日 2ページ
- 1915(大正4)年7月「今回愈々従来関係せる一切の事業を放擲し、専心日本農業雑誌の経営に当り、編輯、外交及び其他の庶務総て自ら之に従ふの決意をなし、健闘努力、速に本誌をして理想の域に到達せしめんことを相期し候(下略)大正四年七月 本誌主幹 松川二郎」
「愛読者各位に謹告」『日本農業雑誌』11巻8号 1915(大正4)年7月1日 120ページ
- 1916(大正5)年5月「君が編輯に成る『日本農業雑誌』」横井時敬「序」大正5年5月付
『四季収穫 蔬菜栽培法』
「予が主宰せる『日本農業雑誌』」編者曰く」大正5年5月1日付
『四季収穫 蔬菜栽培法』
- 1916(大正5)年6月 古在由直「序」「多年農業雑誌の編輯に従事せる松川君」大正5年6月付
『学理実験 米麦増収栽培法』
- 1916(大正5)年7月1日「日本農業雑誌主幹松川二郎先生編」『四季収穫 蔬菜栽培法』『学理実験 米麦増収法』の広告文
『日本農業雑誌』12巻8号 1916(大正5)年7月1日 表紙次ページ

Ⅲ - B 『日本農業雑誌』を離れて

- [1917 (大正 6) 年半ばころから 1920 (大正 9) 年ころ 帝国聯隊史刊行会編纂部に関わる]

「私は嘗て帝国聯隊史刊行会の編纂部を担当して、全国各聯隊の聯隊歴史を編纂したことがあつて、今日公刊されて居る聯隊歴史の殆んど凡ては、私の手に成らないものは無いと称して敢て過言ではない」

「編纂者として一言」『あゝ彼の 赤い夕日』1928 (昭和 3) 年 11 月 25 日
2 ページ

- 1919 (大正 8) 年 9 月 18 日 この日付で「池尻にて」と出る
「書き終りて」『郊外探勝 日がへりの旅』再版 1919 (大正 8) 年 11 月 15 日 東文堂 322 ページ

1924 (大正 13) 年 7 月 5 日 「東京市外世田谷町地尻^{ママ}一四六 松川二郎」と出る

『珍味を求めて 舌が旅をする』日本評論社 1924 (大正 13) 年 7 月 5 日 奥付

- 1929 (昭和 4) 年 6 月 25 日 「東京市外世田谷町池尻一四六 松川二郎」と出る

『全国花街めぐり』誠文堂 1929 (昭和 4) 年 6 月 25 日 奥付

- 1922 (大正 11) 年 7 月 21 日 『読売新聞』有精堂広告文に「旅行文芸の第一人者松川二郎先生」

1925 (大正 14) 年 7 月 29 日 『読売新聞』有精堂書店広告文に「旅行文芸大家松川二郎先生」

- 1928 (昭和 3) 年 6 月 28 日 『読売新聞』5 面全面広告「海へ山への好伴侶」に松川二郎の著書 3 社から多数

- 1929 (昭和 4) 年 5 月 25 日 1926 年 7 月 5 日博文館刊の「『民謡をたづねて』の序文の一節は、高女用の国文教科書に収録された」「序」(日付なし)

『趣味の旅 新民謡をたづねて』1929 (昭和 4) 年 5 月 25 日博文館

- 1929 (昭和 4) 年 8 月 25 日 『読売新聞』記事「この秋にはどんな新著を何を選んで出版しますか」で博文館回答の筆頭に松川二郎「車窓から見た名勝」が挙げられる

Ⅲ - C 旅行時代社を起こす

- 1930 (昭和 5) 年 5 月 6 日 「旅行時代社の第一回座談会」開催 武蔵村山の村山ホテル

- 「座談会」『旅行時代』創刊号 1930(昭和5)年7月1日 129ページ
- 1930(昭和5)年6月1日 この日「社で趣味の水郷めぐりといふのをやつた。つまり、新に生れたわが社の存在を、都の人士、この道のファン諸君の一部にだけでも深く印象して貰はふ、というのが目的だつた」
「サロン編輯」『旅行時代』創刊号 1930(昭和5)年7月1日 155ページ
 - 1930(昭和5)年6月5日 「本書の購読者を中心として東京近郊俱樂部を組織す」と発表
『東京近郊 日がへりの行楽』1930(昭和5)年6月5日初版のはしがき 相当部分 誠文堂
 - 1930(昭和5)年7月1日 雑誌『旅行時代』創刊号発刊
奥付に、編輯者・発行者「東京市外世田谷町池尻一四六 松川二郎」
旅行時代社 東京市神田区錦町一ノ一八錦ビル
 - 1931(昭和6)年1月21日 『読売新聞』記事「放送人の横顔」「松川二郎氏」の箇所に「昨年書齋から街頭へ進出して旅行時代社を起し、東京近郊俱樂部を設立して大いに新時代の旅行界へ断然活躍を開始した、いつ頃の仕入にかゝるものか踵まで垂れるやうな長い釣鐘マントに乗馬用らしいスマートな長靴を穿ち、異様や扮装で毎日赤坂溜池事務所へ出張り、自ら案内の任に当つてゐる」
 - 1931(昭和6)年5月1日 「東京近郊俱樂部一創立。会員募集。事務所＝東京市赤坂区溜池町十一旅行時代社内。会費一年一円二十銭入会金三十銭。会員には毎月会報『東京近郊』を配布す」との記事
「旅行団消息」欄『旅』8巻5号 1931(昭和6)年5月1日 158ページ
 - 1931(昭和6)年6月20日 『東京朝日新聞』記事「紙上アナウンス」に「松川二郎氏 元新聞記者、旅行時代社をやつてゐる」
 - 1932(昭和7)年10月21日 『東京朝日新聞』記事「紙上アナウンス」に「松川二郎氏 旅行家として著名」
 - 1934(昭和9)年8月9日 『東京朝日新聞』記事「松川(二郎)氏留置旅行を種の詐欺嫌疑」「世田谷区上馬一丁目八〇〇旅行家松川二郎氏(四八)(中略)松川氏は最近凋落した自分を取返さうと本年三月来自宅を事務所に東京近郊旅行協会並に知名の旅館経営者ばかりを会員とする東京近郊クラブを設立し(後略)」
 - 1934(昭和9)年8月9日 『読売新聞』記事「名所紹介の松川氏 詐欺で

検挙さる 会員や旅館を喰ふ」「名所旧蹟の紹介者或は紀行文家として知られた世田谷区上馬町一ノ八〇〇元鉄道省嘱託松川二郎(四八)氏(中略)本年三月近県旅行者のため諸種便宜を計ると称して『東京近郊協会』並に『東京近郊クラブ』を創設して会員を募集(中略)最近松川氏はツーリスト・ビュローその他の各種旅行機関が発達して同氏の盛名も漸く衰へて生活が窮迫してゐたといはれてゐる」

Ⅲ - D 『日本歴史』次いで『新日本歴史』の編集者として

- 1946(昭和21)年6月1日 この日付の『日本歴史』創刊号に「編輯者 松川二郎」
『日本歴史』第1巻1号(1946年6月1日)～第2巻1号(1947年1月15日)まで
- 1947(昭和22)年4月25日 『日本歴史』第2巻2号「編輯者」交代を報告 松川二郎から高橋敏夫へ
「本誌誕生以来の編輯責任者である松川二郎氏もこれを機に身をひかれることになり、本号は同氏最後の編集である」「編輯後記」72ページ
- 1947(昭和22)年7月25日 『日本歴史』第2巻3号「前編集責任者松川二郎氏は身をひかれたのであつたが、氏はあらたに新日本歴史社を設て単行本の出版を始められた由である」「編集後記」64ページ
- 1947(昭和22)年 新日本歴史学会設立・『新日本歴史』刊行開始
新日本歴史学会編・刊『新日本歴史 第二巻』1947(昭和22)年12月25日
編集者 東京都文京区西原町一ノ三 松川二郎
発行者 東京都文京区西原町一ノ三 松川二郎
発行所 東京都文京区西原町 一丁目三番地 新日本歴史学会
新日本歴史学会編・刊『新日本歴史 第八巻』1949(昭和24)年12月20日
編集者 東京都文京区西原町一ノ三 松川二郎
発行者 東京都文京区西原町一ノ三 松川二郎
発行所 東京都文京区西原町 一丁目三番地 新日本歴史学会
- 1953(昭和28)年1月25日 「新日本歴史編集委員」の一人として「新日本歴史学会理事 松川二郎」と出る
新日本歴史学会編『新日本歴史 先史及び古代』福村書店 1953(昭和28)年1月25日